

【主題】『社会の一員として、自立して・社会に役立ち・幸せに生きるための基盤づくり』

【副題】～可視化・共有・ファシリテーションを合言葉にしたチャレンジを通して～

【学校・団体名】徳島県美馬市立穴吹中学校

【役職名・氏名】校長 濱田 雅子

1 はじめに

子どもたちが大人になって活躍する社会は、想像を越える速さで変化している。一斉に、正解を速く求めることを要求される時代から、みんなと折り合いをつけながら、多様性のある柔軟な思考を導き出すことが求められる時代に変化している。2021 年度からスタートする新学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」は合言葉となっている。一方で教職員は日々の業務の狭間で「授業の何を、どのように変えれば、『主体的・対話的で深い学び』の実現に繋がるのか」を個々に模索している。

本校は、徳島県を東西に流れる吉野川の間地点に位置する美馬市にあり、2019 年度は生徒数 74 名、特別支援学級 2 学級を含め 5 学級、教職員数は支援員を含め 14 名（うち 20 代が 5 名）の小規模校である。

今春、本校に赴任して感じたのは、子どもたちの誰に対してもさわやかな対応と柔軟性であった。離れたところから立ち止まってあいさつをし、困っている人がいれば手助けしようとする姿が日常的に見られた。

しかし、一方で幼稚園からクラス替えがなく、固定された人間関係・役割が子どもたちの間に根付いてしまっていること、一見穏やかにみえる中にも、自分のことが好きになれず悩んでいる子どもたちの存在が気になった。また、前年度からの引き継ぎ事項の中にあった「問題が起きたときに、その原因を、安易に子どもや家庭のせいにしてしまう雰囲気を改善したい。」というメモも気になった。

2 穴吹中学校のめざす姿

教職員と面接を行い、現状を振り返ると次の課題が出てきた。「自己肯定感（どんな自分も受け入れようとする力）を育てたい。」「生徒指導や学習指導上の課題を、子どもや家庭のせいにせず、自分たちの課題として受けとめたい。」「教員主体から、生徒主体の授業へ進みたいが、何から始めればいいのか迷っている。」そこで、学校教育目標と重点目標を次のように決めた。

社会の一員として、自立して・社会に役立ち・幸せに生きるための基盤（習慣）づくり

① エンパワメントなチームづくり

～「承認」し合える教室・職員室・家庭・地域～

② 考え合い・聴き合い・学び合う授業改革

～ティーチングとファシリテーションのバランス～

③ 自己肯定感を育てる教育活動

～自分も相手も同じように大切に～

④ 幸せになるための「働き方改革」

～「見通しと段取り」「集中と選択」～

⑤ 家庭や地域との連携の推進

～家庭や地域のために役立つ体験～

生徒たちには、めざす生徒像を「大丈夫」「人生は自分次第」「ありがとう助かった」の合言葉で伝えた。

3 穴吹中学校のチャレンジ

大きな教育の転換期に迷うことなく、教職員全員で学校教育目標を実現するために次の 2 つにチャレンジした。

(1) ビジョンとミッションを可視化で共有

4 月 1 日から毎日「ざ・共通理解」と題した B 6 判の通信を全教職員対象に校長が発行している。この通信には 3 つの意味がある。

① 穴吹中学校のめざす姿を示す羅針盤として

② 日々の穴吹中学校で起こっている事案を共有する足下を照らすランプとして

③ 教職員同士を、行事間をつなげるロープとして
配布した通信は、日々の計画でもあり振り返りでもある。全教職員が B 6 判ノートに毎日貼り、その都度実践を振り返り、見通しを立てている。

内容は、次の 6 点を、現状に合わせて、具体的に記している。

① 職員室で話題になっていること

② 校長室に届く子どもたちの声と姿

③ めざしたい「ゴール」の姿

④ 教職員の実践例・具体的な作戦

⑤ 伝えたいメッセージ・著書の紹介

⑥ 伝達講習（研修で学んだこと）

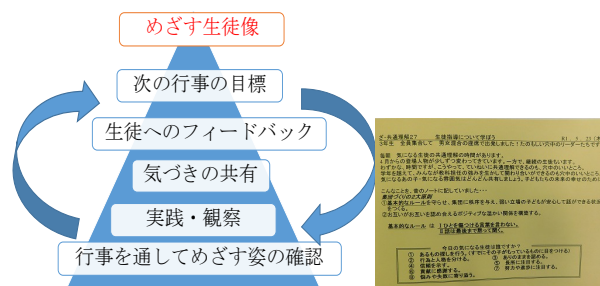
次のメッセージは「ざ・共通理解」に何度も表記されている。私たちが大事にしている価値である。

- ・エンパワメントなチーム
- ・パッと動く、みんなで動く、気になることは話してみる
- ・繰り返されるシンプルな指示とたっぶりのプラスのフィードバック
- ・「意味」を考える。「ゴール」を考える。
- ・Done is better than perfect.
- ・見通しと段取りで心のゆとり
- ・2分前に教室へチャイムと同時にねらい明示
- ・ノイズを減らす
- ・丁寧に寄り添い丁寧に耳を傾け丁寧に観察
- ・始まりを揃える
- ・ルールとリレーション
- ・この体験を通して子どもたちは何を学ぶか
- ・「育てる」という視点を忘れない
- ・子どもたちも私たちも力をもっている
- ・職員室は教室の、私たちは子どもたちのモデル

目の前で起こっている問題は、私たち教職員にとっても、子どもたちにとっても成長のチャンスであると捉えること。そのチャンスを、しっかり振り返り、全員の一步とすることを常に可視化し確認している。

また、4月の対面式から始まって、委員会活動・部活動・遠足・修学旅行・校内陸上競技大会・文化祭・小学校との連合運動会等、生徒たちは多くの行事や学習・活動を体験する。しかし、その多くが前年度踏襲であったり、個々の行事や活動に一貫性が見られなかったりする。その学習や体験を通して育てたいのは、めざす生徒像である。そこで、行事や活動の度に、「この体験を通して、めざす生徒像の何に迫るのか」を常に確認しながら進んでいる。そして、行事や活動ごとの生徒たちの変容を振り返り、次の行事での目標設定を行っている。

教職員からは、「日々の振り返りができる。」「教室や部活動での子どもの様子を共有できる。」「次何をするか意識して仕事するようになった。」「フィードバックや組織マネジメントの大切さが実感できる。」「周りの先生の取り組みがわかり参考になる。」という感想が聞かれた。気持ちを揃えてゴールをめざす心地よさを感じている。保管し読み返している姿が印象的である。



「行事をつなげてゴールをめざすイメージ図」 「ざ・共通理解27」

(2) ファシリテーションにチャレンジ

①モデルをみせる

4月12日、全校生徒74人に「第1回六中ファシリテーションタイム」を校長がファシリテーターになって実施。この日のゴールは「ミニホワイトボード（MWBと表記）を使ってみんなとつながろう」と「※1オープン・クエスチョンにチャレンジ」の2つ。MWBを使ったジャンケンゲームや意見表明で、和やかな雰囲気をつくり、ペアコミュニケーションに挑戦。自分からもいくけれど、相手からも返ってくるバランスのいいコミュニケーションを意識して聴き合う練習を実施。

※1オープン・クエスチョンとは株式会社ひとまちのちょんせいこさん（プロのファシリテーター）がまとめた情景を共有するための9つの質問

- 1～というと？
- 2 どんな感じ？
- 3 例えば？
- 4 もう少し詳しく教えてください。
- 5 具体的には？
- 6 どんなイメージ？
- 7 エピソードを教えてください。
- 8 なんでもいいですよ
- 9 他には？

〔7のエピソードまで話を深めるのが情報共有の鍵〕



〔MWBで遊ぶ〕

〔オープン・クエスチョンに挑戦〕

②プロに学ぶ

6月3日、前述の株式会社ひとまちのちょんせいこさん（ホワイトボード・ミーティング®の開発者）に来校していただき、プロの手ほどきを全校生徒と全職員が受けた。ホワイトボード・ミーティング®の特徴は、「進行役のファシリテーターがホワイトボードに意見を可視化する。」「9つのオープン・クエスチョン（前述）で情景が共有できるまで深める。」「話し合いに『発

散→収束→活用』のプロセスを作り、色をわけて書く。

①発散（黒）オープン・クエスチョンで深めながら意見をドンドン出す。②収束（赤）軸を決めて、出てきた意見を方向づける。③活用（青）具体的な行動や活動計画を決める。」である。

初めてホワイトボード・ミーティング®を体験した生徒からは「意見が言いやすかった。」「言ったことを書いてくれるのでうれしかった。」「オープン・クエスチョンだけで質問するのは難しかったけど、話が深まる感じがした。」教職員からは、「互いの気持ちが可視化によって明確になり、理解し認め合う姿が見られた。」「発散→収束→活用のプロセスにそって進むので、話し合いが活発にできた。」という気づきがあった。

③みんなでチャレンジ

ア ファシリテーターのいる学びの場

学級では、特別活動の話し合いにホワイトボード・ミーティング®を取り入れている。4人で1グループをつくり、順番にファシリテーターを交代していく。教員がタイムキーパーをして話し合いを進める。これまで、次のようなテーマで話し合った。

〔総体への決意〕

発散 最近部活でがんばっていること (10分)

収束 大切にしたいことチャレンジしたいこと (3分)

活用 部員へのメッセージ (5分)

〔穴中のいいところベスト3〕

発散 穴中のいいところ (12分)

収束 中でも特に伝えたいこと (5分)

活用 ベスト3 (3分)

〔避難訓練を振り返って〕

発散 今日の訓練やってみてどうだった？ (10分)

収束 良かったこと2つ 困ったこと2つ (2分)

活用 避難の心得3箇条 (3分)

〔来週への幸せ伝言〕

発散 今週幸せだったこと (1分)

収束 中でも一番伝えたいことと (30秒)

活用 来週どうしたい？ (30秒)

週末、記入したミニホワイトボードを残しておき、月曜日の朝書かれた内容を読み返し、1週間をスタートする。「幸せなことは忘れるから思い出すことは大切!」と女子のつぶやきから3年生が考案したテーマ。

教職員からは、「普段の生活の中で、オープン・クエスチョンで会話する場面が増え、相手の思いをしっかりと

り聴こうとする姿勢が育っている。』『『考えることに意味がある』と生徒が自覚して取り組んでいた。繰り返すうちに慣れてきて、自分たちだけで話し合いを進めている。』『一人一人の意見を公平に扱える。互いの意見をきちんと把握し、考えを深められている。』『聞き上手・話し上手になり、日常のコミュニケーションが豊かになっている。』『行事毎に振り返りをホワイトボード・ミーティング®とする習慣がついた。次への課題を見つけ、どうすれば課題が解決できるかを考える『自治の精神』が育っている。』という感想が聞かれた。



〔ホワイトボード・ミーティング®とペアトーク〕

各教員が実施したホワイトボード・ミーティング®の発散・収束・活用の問い立ては、一覧表で可視化し職員室で共有し活用している。

イ 学び合い学習へ

ホワイトボード・ミーティング®を定期的 to 実施したり、MWBを活用した意見交換を重ねたりするうちに、子どもたちのコミュニケーションが温かくなり始めた。この機会に、2年生数学「連立方程式」の単元で子どもたちによる学び合い学習を実施した。合言葉は「わかって50点教えて50点合わせて100点」



〔班ごとに課題を決めて学び合う〕

友達にじっくり教えてもらえるので、数学が苦手な生徒の中にも、連立方程式を解くことに楽しみを見いだす姿が見られた。一斉授業より、より主体的な取り組みであった。また、教えることに喜びや価値を見いだす生徒もおり自己肯定感の向上につながっている。今後は、生徒たちに見通しをもたすための手立てを行い、単元全体の学び合い学習にチャレンジしたい。

ウ. 家庭でもファシリテーターになって

家庭にお願いしている行事アンケートを、生徒たちがファシリテーターになってホワイトボード・ミーティング®を実施した。

〔文化祭を振り返って〕

発散 文化祭どうだった？

収束 良かったこと2つ 困ったこと2つ

活用 来年度への提案

子どもが聴き役だから、保護者の方々の忌憚のない意見・感想が集まった。準備物・時間配分など具体的な提案があり、来年度の要項に早速盛り込んだ。

エ. ファシリテーターのいる生徒指導

ホワイトボード・ミーティング®の手法を生徒指導の場面でも活用している。生徒からの聞き取りでは、教員がホワイトボードに生徒の言葉を書き出す。このときできるだけオープン・クエスチョンで質問し情景が共有できるまで話を聴く。教職員の共通理解の場面では次のプロセスで進める。

発散 起こったこと・聞き取ったこと

収束 生徒の強みと弱み・過剰刺激になっていること

活用 対応の仕方と役割分担

1枚のホワイトボードに可視化された情報を見ながら話し合うため、重複したり脱線したりすることなく今後の役割と目指すゴールまで確認できている。

「その時起こっていることだけでなく、背景にあるものを共有することができる。」「方策や手立てがたくさん出てくる。」「みんなで同じ方向で生徒理解・生徒指導ができるようになった。」「生徒の話したことをそのまま書くので、教員の先入観や感情が入らないのいい。」「後で見てわかりやすい。」等効果が見られた。

オ. ファシリテーターのいる定例進捗会議

毎月一回組織の基礎体力づくりとファシリテーションの練習を兼ねて、ペアをつくり定例進捗会議を実施している。

発散 今月どうだった？ (4分)

収束 良かったこと1つ 困ったこと1つ (1分)

活用 これからどうしたいどうなりたい？ (1分)

このあと、互いにアドバイスをする。ホワイトボードは写真に残し、今後の予定に活かしたり、校長との面接資料にしたりして活用している。

「業務の振り返りができ、今後の予定を改めて確認できる。」「毎日すべての先生と話すことはできないが、ホワイトボードを見れば、それぞれの先生方の状況がわかり、サポートやアドバイスができる。」「自分自身の気持ちの整理もでき、やる気につながる。」等の感想があり、短時間で互いの状況を知ることでき、チームづくり・ゴール共有に役立っている。



〔生徒指導共通理解〕



〔定例進捗会議〕

4 成果と課題

限られた時間内で教職員全員が同じゴールに気持ちを合わせ向かっていく手立てとして「可視化」の効果を改めて感じた。情報共有さえできれば問題解決できる体験を重ねることで、職員室に一体感と自分ごととして対応する姿勢が生まれている。

また、ファシリテーションというスキルとマインドを学校文化に取り入れることで、生徒の中に公平に話を聴く雰囲気ができている。発言が得意な子もそうでない子も同じように機会が与えられ、関心をもって好意的に意見を聴いてくれる経験は、安心して話せる場づくりにつながっている。

毎月実施している生活アンケートにも変化が見られた。4月当初は、アンケートを実施する度に、生徒からの聞き取りが必要な事案の記載があった。しかし、9月末実施のアンケートでは、生活の中で気になる点はあるものの、それを解決するための対策案を書ってくる生徒が多かった。まさに主体的であり、自治の力が育ち始めている。

課題としては、全ての教職員がファシリテーションスキルアップをめざし、各教科においてもホワイトボード・ミーティング®を活用する場を増やしたい。発散・収束・活用のプロセスを通して深い学びへつなげるためには、どのような問い立てが適しているのかについて、今後研究したい。そして、この取り組みが、学力や学習習慣の指数の向上として表れるまで取り組みを続けたい。

5 おわりに

ファシリテーションの基本は「信じて任せる」ことであると考えている。生徒たちにも私たちにも力があることを信じて、「可視化」「共有」「ファシリテーション」を合言葉にさらにエンパワーし続ける学校づくりを進めたい。

参考文献：「ちょんせいこのホワイトボード・ミーティング」

小学館 ちょんせいこ著